

日・韓漢字字体の相違による問題点

— 韓国人日本語学習者向けの効果的な漢字指導を目指して —

崔 廷珉

【キーワード】

韓国「第7次教育課程」・常用漢字・基礎漢字・誤表記・「漢字字体干渉」

1. はじめに

国際交流基金の『1998 海外日本語教育機関調査』（1999）によれば、海外の教育機関における日本語学習者数は約209万人であり、前回（93年）調査時の約162万人を大幅に上回っている。中でも、韓国の日本語学習者数は946,857人と、海外の日本語学習者総数（209万人）の約45%を占め、最も多い。これは、韓国と日本の地理的近さ、韓国語と日本語が同じ語順であることなどに加えて、韓国人にとって日本語は学習しやすい言語というイメージがあることも大きく寄与していると思われる。韓国語は日本語と同じくアルタイ語系に属し、表記は表音文字であるハングルを用いるが、それ以外にも日本語との類似点は多く、文の構造などは日本語と殆ど変わらない。また、古来から韓国は日本と同じく中国から伝来した漢字も使っており、日本語との共通点が多い。

しかし、安易に日・韓両国語の類似性のみを強調して、明らかに違う言語である日・韓両国語の差異を見逃してはならない。特に、韓国人学習者に対する日本語教育において、韓国も漢字系であるから、当然、漢字は熟知しているだろうという前提で、系統だった漢字教育が行われていないのが現状である。しかし、日・韓両国の代表的な漢字使用の基準である常用漢字と基礎漢字には、字種や字体はもちろん、音や訓などにも数多くの違いが見られる。さらに、日常生活での漢字の使用頻度には著しいギャップがある。

したがって、韓国人学習者に対する日本語の漢字教育は、日常生活で殆ど漢字を使わない韓国の現状を考慮したうえで、両国の漢字の相違点を十分に勘案に指導法をよく工夫する必要がある。

本稿では、まず韓国の日本語教育における漢字教育の現状を述べ、こ

れを踏まえて、主に韓国の基礎漢字と日本の常用漢字を対照比較し、韓国学習者に日本語の漢字教育を行う際に注意すべき点をまとめることにする。

2. 韓国における日本語教育

韓国の場合、これまで「日本語」の科目は高校に設置されてはいたが、1997年度の「第7次教育課程」¹⁾により中学校にも設置され、以来中学校で日本語を学習する生徒数は増加し続けている。1997年に開発・公布された「第7次教育課程」は、グローバル化・情報化への適応を目指す自己主導的な能力の育成と、生徒の能力・適性・進路に応じる学習者中心の教育の実践を基本方針としている。すなわち、指定された科目だけを教えてきた従来の教育課程とは大きく変わって、「第7次教育課程」では、裁量活動を通じて生徒が教科をかなりを選択できるようになったのである。中でも中学校における裁量活動の特徴は、「生活外国語」が、「漢文（漢字）」・「コンピュータ」・「環境」と共に選択科目として加えられたことである。中学校に導入されている「生活外国語」は、日本語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、ロシア語、アラビア語の7科目である。これは、これまでの英語中心の外国語教育政策から、国際化と地域分権化に効果的に対処できるような政策の一環としてなされたものである。

現在、韓国は「第7次教育課程」により、「生活外国語」が全国2809校の中学校のうち、218校に導入されている。言語別の設置状況を見ると、日本語は183校の中学校に設置されており、「生活外国語」を導入している中学校の85%を占めている。【表1】は、中学校における「生活外国語」の言語別の設置状況を示したものである。

【表1】 韓国の中学校における「生活外国語」設置の状況²⁾

(2003年3月現在)

「生活外国語」が設置されている中学校の数					
日本語	中国語	ドイツ語	スペイン語	フランス語	合計
183校	26校	5校	3校	1校	218校

*218校のうち1校は複数の「生活外国語」（日本語・中国語）を設置している。

また、韓国の中学生586名を対象に行った「生活外国語」選択調査の結果³⁾によると、日本語を選んだ生徒数は全体の60.9%である357名で、他の外国語を選んだ生徒数をはるかに上回っている（【表2】参照）。学習者中心・各学校中心の学校教育のために裁量活動の新設と特別活動の

強化を目指す「第7次教育課程」の趣旨からしても、今後とも日本語を設置する中学校の数は増加し、中学校から日本語を学習する生徒がさらに増すと予想される。

【表2】韓国の中学生に対する「生活外国語」選択調査

「生活外国語」の種類	頻度 (%)
日本語	357 (60.9%)
フランス語	103 (17.6%)
中国語	50 (8.5%)
ドイツ語	36 (6.1%)
スペイン語	8 (1.4%)
アラビア語	4 (0.7%)
ロシア語	2 (0.3%)
無応答	26 (4.4%)
合計	586 (100%)

学習者が科目を選択できる「裁量活動」の新設・強化という、従来の教育課程から大きく発展した「第7次教育課程」では、「生活外国語」の性格を次のように述べている。

학습자들은 초급수준의 생활외국어를 익혀 해당 외국어 사용자와 기초적인 의사소통을 하며, 아울러 상급학교에 진학하여 해당 외국어를 계속 학습할 수 있는 바탕을 마련한다.

学習者が初級レベルの生活外国語を身につけて、当該外国語使用者との基礎的コミュニケーション能力を持つと共に、上級学校へ進学して当該外国語を学びつづけるための土台を築く。(日本語訳は筆者)

これは、生活外国語を通じて学習者の口頭と文字による基礎的コミュニケーション能力を育てることである。ここで基礎的コミュニケーション能力とは、教育課程で規定している語彙・文法の能力と、当該外国語使用者との日常生活の範囲内でのコミュニケーション能力、例えば、挨拶や肯定・否定などの日常生活における表現を学習することを意味している。ただし、使われる語彙および文は、原則として教育課程の決める範囲内とする。

では、この“教育課程の決める範囲”とは何であろうか。まず、中学校における日本語の語彙の範囲は、高校教育課程における834個の基本語彙中の200個内外を使用するように定められている。また、文字に関しては、次のようにその範囲が指定されている。

문자는 히라가나, 가타카나를 사용하고, 한자는 사용하지 않는 것을 원칙으로 하되, 숫자와 같은 기초 학습에 필요하다고 생각되는 문자에 한하여 적절히 사용할 수 있다.

文字は平仮名、片仮名を使用し、漢字は使用しないことを原則とする。ただ、数字のように基礎学習に必要とされる文字に限っては適切な使用ができる。(日本語訳は筆者)

また、数字のような簡単な漢字や、中学生が既に知っているくらいの漢字の場合は、必要によって併用してもよいと規定されている。しかし、韓国の小学校では漢字教育が義務づけられていないことを考えれば、数字のような簡単な漢字ですら全ての中学生が知っているとは限らず既習漢字は個人によって千差万別と言える。

では、このような現況に対して、「第 7 次教育課程」に準じる「生活日本語」の教科書はどのように対応しているのだろうか。次に示すのは、韓国の中学校で採用されている「生活日本語」教科書の一部である。

(例 1) 韓国の中学校で採用されている生活日本語の教科書⁴⁾

9. かりても いいですか。

(A : 少女1 B : 少女2 C : 少女1のお母さん)

A : いま なんじ?

B : 7じ

A : 7じ?

B : うちに でんわする?

A : うん、でんわ かりても いい?

B : いいよ。なんばん?

A : 3465の2187。

B : さん、よん、ろく、ごの、に、いち、はち、なな。

A : もしもし、わたし。いま、みきの うちに いるんだけど、
もう ちょっと あそんでも いい?

C : だめよ。はやく かえってきなさい。

A : あと 1じかん。おねがい。

C : じゃあ、9じまでには かえってきてね。

A : うん、じゃあね。

B : だいじょうぶ?

A : うん、あと1じかん。

B : きを つけてね。

A : おやすみなさい。

(例1)に見られるように、現在、中学校で採用されている教科書は、基礎的コミュニケーション能力を育てることを目的として日常的な会話を中心にしてはいるものの、文章には漢字が全く使われていない。この教科書は10課で構成されているが(例1は9課)表記はすべて平仮名と片仮名でなされ漢字は導入されていない。さらに、簡単な数字でさえ、漢字ではなくアラビア数字で表記されている。

これは漢字に馴染んでいない生徒への指導上の配慮ではあるが、漢字を導入すべきところで導入していかなければ、日本語では漢字は重要な学習要素であるにも関わらず漢字指導がなおざりにされ、漢字に対する生徒の負担がかえって増えることになる。さらに、漢字ぬきの日本語を学習する生徒は、日本語の表記は平仮名と片仮名で十分と思うおそれすらある。

また、崔(2004)は、「漢文(漢字)」として既習漢字がある韓国人日本語学習者の場合、漢字字形(旧字体)の干渉が日本語の漢字字形(新字体)の認知に影響を及ぼし、漢字学習が妨げられると報告している。

それでは、「漢文」として学習する韓国の基礎漢字と日本語の文字として学習する常用漢字にはどのような差があるか、字形を中心に探ることにする。

3. 日本の常用漢字と韓国の基礎漢字

漢字系の国々で基礎的とされる漢字群の選択にはいくつかの基準が複雑に絡み合っており、その基準の違いによって選ばれる字種に違いが出ている。日本の場合、常用漢字表は、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示したもので、字種(1945字)・字体・音訓・語例などを総合的に示した表である。

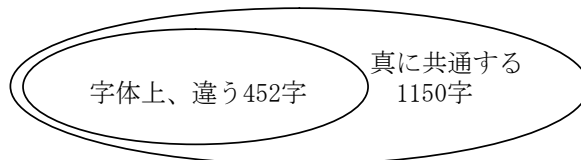
一方、韓国の基礎漢字は、1972年に文教部(現在の教育人的資源部、日本の文部科学省に当たる)によって制定され、2000年に改訂された1800字で、中学(900字)・高校(900字)で学習すべき漢字を示したものである。すなわち、常用漢字が一般の社会生活における漢字使用の目安を示したのに対して、基礎漢字はあくまでも漢文(漢字)教育において学習すべき漢字を制限したものである。

ここでは、常用漢字と基礎漢字の字種・字体・字音・字訓などに様々な異がある中で、主に字体について日・韓の違いを考察する。

日本の常用漢字1945字、韓国の基礎漢字1800字、これを量的に単純比較しただけでも145字の違いがある。このほかにもずれはあり、韓

【図 2】 共通漢字 1602 字における字体の相違

‘共通する’1602字



すなわち、韓国の基礎漢字と日本の常用漢字に同じ字が多いということだけで、すぐに日本語の漢字学習の向上につながるとは言えない。韓国人学習者への日本語の漢字指導において大切なことは、韓国語として習得した漢字能力を日本語としての漢字能力にどうやって有効に結びつけるか、である。

韓国の漢文（漢字）教育において使われている漢字は旧字体であるため、韓国人学習者は漢字を旧字体で書く可能性がある。また、見逃さない重要な要因として、現在の韓国では日常生活で漢字が殆ど使われていないため、一般に漢字との接触頻度が低いという現実がある。

日本語の漢字指導をより効果的に行うためには、韓国人の既習の漢字能力を大いに活用して日本語の学習と教育に臨むべきではあるが、こうした事情に関する知識も十分に持って韓国人学習者に合う漢字指導をする工夫が不可欠であろう。

4. 字体の相違による問題点

—韓国人初級学習者の誤表記を中心にして—

漢字を書く、つまり書字は、漢字学習のうちで最も習得困難な部分である。吉田ら（1974）によれば、これは再認より再生が難しいということのほか、漢字学習が相互に関係する多数の漢字の学習であることが、その理由である。

漢字の誤表記は、非漢字系のみならず漢字系の初級学習者にもよく現れる現象である。日本語の漢字教育は、誤らないように学習者を指導するのが最も望ましいが、既に行われた誤りに対しては、その誤りを学習者が繰り返さないように指導することも必要である。

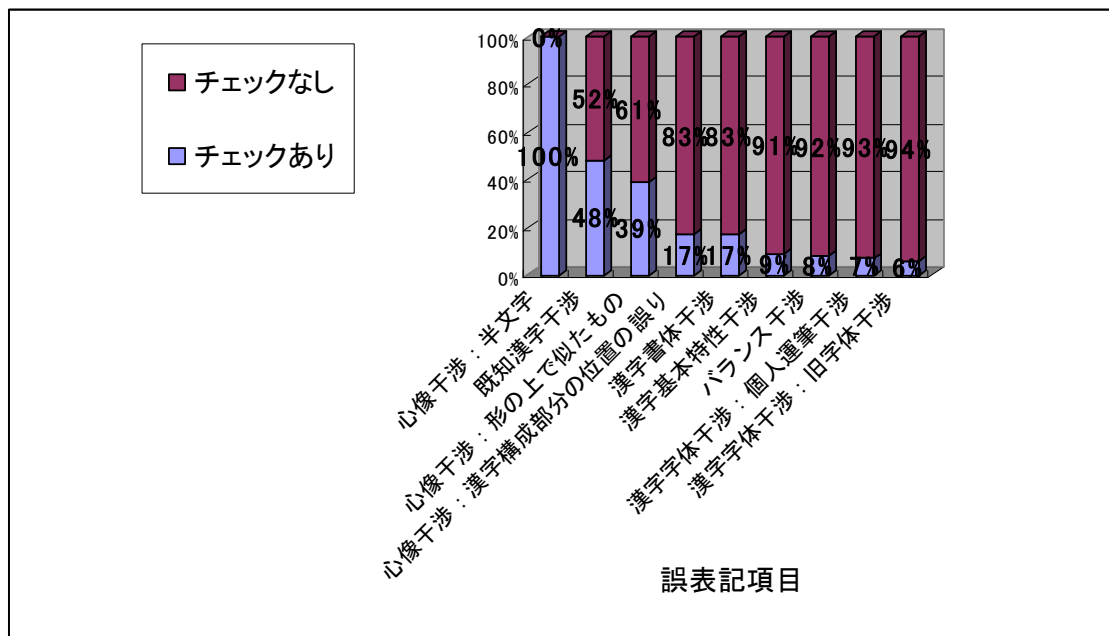
韓国人初級学習者を対象にして筆者が行った書き取りテストの実験結果によると、学習者の繰り返す誤表記は、誤表記という意識がない、つまり、学習者が「誤表記として認知していない誤表記」である可能性が高いことが認められた。さらに、「誤表記として認知していない誤表記」は、さらに新しい誤表記を発生させやすいことも認められた。

【表 4】学習者の認知の差による誤表記の分類

「誤表記として認知している誤表記」	「誤表記として認知していない誤表記」
既知漢字干渉 心像干渉：半文字 心像干渉：漢字構成部分の位置の誤り 心像干渉：形の上で似たもの	漢字基本特性干渉 漢字書体干渉 バランス干渉 漢字字体干渉：旧字体干渉 漢字字体干渉：個人運筆干渉

また、書き取りテストを実施した際に、学習者に自分が書いた字に対して誤表記と思われるものをチェックしてもらうことにした。ここで、自分が書いた誤表記に対して、誤表記であるにも関わらずチェックをしないということは、それが被験者にとっては誤表記ではないことを意味する。すなわち、その誤表記は被験者にとっては正字なのである。とりわけ、誤表記の分類項目の中で、「漢字基本特性干渉」、「漢字書体干渉」、「バランス干渉」、「漢字字体干渉：旧字体干渉」、「漢字字体干渉：個人運筆干渉」は、誤表記にも関わらずチェックされない割合がそれぞれ、91%、83%、92%、94%、93%であって、学習者はこのような誤表記を「誤表記として認知していない」ことが認められた。

【図 3】書き取りテストにおける被験者の誤表記チェック度⁵⁾



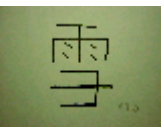
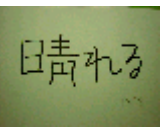



特に、「漢字字体干渉：旧字体干渉」の場合は、誤表記としてチェックした割合が、誤表記項目の中で一番低い 6%であることから、日本語の

漢字指導を行う際に注意すべきところと思われる。既習漢字数が多い学習者⁶⁾ほど、日・韓の漢字は字形において明らかに違うにも関わらずその字形差を認知できずにこのような誤表記がよく現れていた。このことから、韓国人日本語学習者のより効果的な漢字指導のためには、こうした日・韓の漢字における字形の相違に関する知識を持って、韓国人学習者に合う漢字指導を工夫する必要がある。

【図4】は「漢字字体干渉：旧字体干渉」の例を示したものである。

【図4】「漢字字体干渉：旧字体干渉」による誤表記の例

				
海	会社	雪	晴れる	黒い

5. おわりに

本稿では韓国の「第7次教育課程」を中心に日本語教育における漢字教育と日・韓の漢字における字体上の相違字を考察し、その結果、次のような問題が潜んでいることが明らかになった。

- ・ 基礎的なコミュニケーション能力を育てるのが目的であるとして殆ど漢字を用いずに平仮名・カタカナだけで表記するのでは日本語による表現にはならない。日本語の文字として漢字を教科書に導入し、指導することが必要である。
- ・ 韓国人日本語学習者の誤表記を分析した結果、誤表記としての認知率がもっとも低かったのは漢字字体に基づく誤表記であることが明らかになった。このことから、韓国人学習者に対する日本語の漢字指導では、日・韓の漢字の類似字だけではなく、字体上の相違字も指導する必要がある。

日本語における漢字の意義は、単に日本語によるコミュニケーションの手段にとどまらず、より広く漢字文化圏に共通する文化要素とも見なしうる。したがって、日本語の初級段階から漢字に殆ど触れることなしに中級以降に進んだ場合、総合的な学習効果のみならず理解の広がりや深まりという点で発展性に欠ける恐れもある。

日本語の表記指導において、易から難に向かうのが好ましいとか、学習者の感じる負担を減らすほうが好ましいとかいう教育上の配慮を軽視するわけでは決してない。しかし、そのような配慮も、まず文字表記の重要性を再認識して日本語による表現を考え、そこへの効果的な方法という観点から指導法を導き出すべきである。漢字が難しいからといっ

て、その負担を不当に軽減しようとして、かえって日本語そのものの学習の妨げになることを見逃してはならない。

清水（1994）は、中国・台湾 69 名、韓国 27 名、アジア諸国 21 名の計 117 名の日本語学習者を対象とした漢字学習調査を通じて、「必ずしも中国、台湾、韓国は日本語の漢字学習が『自習できる』と答える者が多いとは言えない」と述べている。これは、漢字系とされる学習者であっても漢字知識が極度に弱い者が増えている現実を反映しているのであろう。

漢字教育の現場では、出身地域にかかわらず、個人としてある程度の漢字力を持っている者を「漢字系」、そうではない者を「非漢字系」として扱うことになっている。その点で、武部（1989）の「日常生活で漢字を用いている者（漢字系学習者）と、日常生活で漢字を用いていない者（非漢字系学習者）」というくくり方などは、実際的な定義と言えるかもしれない。ただし、韓国に関しては、個人によって漢字知識が千差万別であることを考えれば、「韓国人学習者＝漢字系」あるいは「韓国人学習者＝非漢字系」のように二分できるものではないようである。このようなどころこそ、教師側の工夫が大いに必要となるところであろう。

チェ・ジョンミン（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

【注】

- 1) 第 7 次教育課程は学年別に次のように施行されつつある。
 - ・ 2000 年 3 月 1 日 : 小学校 1, 2 学年
 - ・ 2001 年 3 月 1 日 : 小学校 3, 4 学年、中学校 1 学年
 - ・ 2002 年 3 月 1 日 : 小学校 5, 6 学年、中学校 2 学年、高等学校 1 学年
 - ・ 2003 年 3 月 1 日 : 中学校 3 学年、高等学校 2 学年
 - ・ 2004 年 3 月 1 日 : 高等学校 3 学年
- 2) 韓国教育人的資源部の発表（2003 年 3 月）による。
- 3) 韓国教育課程評価院（1999）『第 7 次教育課程による中学校教育課程の実行方案研究』
韓国の地域別、規模別に選んだ中学校 19 校の中学生 2・3 年生 586 名を対象にした調査結果である。
- 4) 韓国人的資源部（2003）『中学校生活日本語 こんにちは』大韓教科書（株）
- 5) 韓国人中学生である日本語学習者 25 名を対象に実施した誤表記チェック

度実験結果である（崔 2004）。

6) 【表 5】被験者別の既習漢字数と「漢字字体干渉：旧字体干渉」チェック度
(2003年4月7日現在)

学年	名前	年齢	日本語 学習歴	既習漢字数	誤表記としてのチェック度 (「漢字字体干渉：旧字体干渉」)
中 1	A	90年5月生	—	0字	3%
	B	90年3月生	1ヶ月	0字	15%
	C	91年1月生	2ヶ月	0字	17%
	D	90年7月生	2ヶ月	0字	32%
	E	90年9月生	—	50-100字	6%
	F	90年8月生	2ヶ月	100字	8%
	G	90年9月生	1ヶ月	100-200字	5%
	H	90年6月生	6ヶ月	200字	4%
	I	91年2月生	3ヶ月	200-300字	2%
	J	90年5月生	2ヶ月	300-500字	4%
	K	90年10月生	1ヶ月	500-700字	0%
中 2	L	89年11月生	2ヶ月	0字	12%
	M	89年12月生	2ヶ月	0字	15%
	N	89年9月生	3ヶ月	100字	5%
	O	89年10月生	1ヶ月	200字	2%
	P	89年4月生	2ヶ月	200-300字	4%
	Q	89年4月生	3ヶ月	200-300字	3%
	R	89年6月生	—	300字	0%
中 3	S	89年1月生	1ヶ月	100字	5%
	T	88年3月生	1ヶ月	100-200字	4%
	U	88年7月生	3ヶ月	100-200字	6%
	V	88年9月生	11ヶ月	100-200字	0%
	W	88年12月生	7ヶ月	200-300字	5%
	X	89年1月生	8ヶ月	300-400字	3%
	Y	87年11月生	1年	300-500字	0%

*名前順は既習漢字数順である。

*「—」は、1週間未満の在日歴・日本語学習歴を表す。

*既習漢字数は、対象者の自己判断によるものである。

【参考文献】

- 阿久津智（1999）「漢字圏と非漢字圏」『拓殖大学日本語紀要』拓殖大学留学生別科
- 石田敏子（1987）「漢字系学習者の日本語力の分析」『語学研究』国際基督教大学教養学部語学科
- 海保博之（2001）「日本語教育と認知研究」『日本語教育』日本語教育学会
- 韓国教育部（1997）『外国語科教育課程（II）』教育部
- 韓国教育部（1997）『中学校裁量活動の選択科目教育課程—漢文, コンピュータ, 環境, 生活外国語—』教育部
- 韓国人的資源部（2000）『特別活動裁量活動—教育課程の編成と運営』
- 韓国人的資源部（2003）『第7次教育課程適用優秀事例集—中学校裁量活動と

- 特別活動、準備から評価まで』
- 韓国人的資源部（2003）『中学校生活日本語 こんにちは』大韓教科書(株)
- 韓国教育課程評価院（1999）『第7次教育課程による中学校教育課程の実行方
案研究』韓国教育課程評価院
- 清水百合（1994）「漢字教育のあり方に関する学習者の問題意識調査」『筑波大
学留学生センター日本語教育論集』第9号 pp. 51～60
- 武部良明（1981）『日本語表記法の課題』三省堂
- 武部良明（1989）『NAFL 選書2 漢字の教え方－日本語を学ぶ非漢字系外国人
のために－』アルク
- 崔廷珉（2004）「初級学習者の効果的な漢字学習のための漢字誤表記の研究－
誤表記における韓国人中学生の認知をもとにして－」早稲田大学大学院修
士論文
- 曹喜澈（1994）「漢字系学習者のための漢字教育のあり方－韓国人の日本語学
習者を中心に」『世界の日本語教育』
- 豊田悦子（1995）「漢字学習に対する学習者の意識」『日本語教育』85号 日
本語教育学会
- 韓中善（2002）「コンピュータ教育における韓日漢字の問題」『日本語学研究』
第6輯
- 松田彌生・吉田章宏・志村正子（1974）「漢字の教授＝学習－誤字分析からの
接近」『東京大学教育学部紀要』14巻
- 林京玉・高木裕子（2000）「『ハングル世代』・『漢字併用世代』別に見た韓国
人日本語学習者の漢字学習にかかわる問題」『2000年度日本語教育学会秋季
大会予稿集』日本語教育学会